

Y09a 保育園での天文教育普及活動(天文あそび)5年間のまとめ

富田晃彦(和歌山大学)

富田は、ひかり保育園(大阪府藤井寺市)での「うちゅうのおはなし」の毎月訪問などの活動をつづけてきた。園児が対象なので、「天文あそび」と呼んだ方がいいだろう。これまで得たことをまとめると:(1) 園児にとって、おとぎの世界とつながりつつ、科学の世界への窓口となる天文は大人気である。3歳では目立たないが、4歳では女の子は急に黄道十二宮の話が好きになる。はやぶさの話は、男女問わず4歳であればよく知っている。(2) 園児は空の色、月、雲の形、雲の動きに大きな興味を持っている。オリオンの三ツ星は、多くの園児がすでに見つけている。夕方遅くなるお迎え、また帰宅まで時間がかかることは、このような気づきの機会でもある。(3) 園児は保護者にこの活動を伝え、保護者は、昔持っていた星への興味が思い出すようだ。それぞれの家で、園児と保護者の間で星の話が続く。(4) 保育者も、園児とともに星への興味が大きくなっている。園で、園児と保育者の間で星の話が続く。(5) 園児は集中力がないと思われるだろうが、興味ある話であれば園児は没頭し、半時間程度であれば話題数は2,3で十分である。(6) 園児はすでに理屈屋であり、見たもの、聞いたものを、とにかく説明したがる。理屈内容が荒唐無稽なことはあるが、理屈をこねること自体が頼もしい。(7) 天体写真は、読み解き方を知っている者であれば、種々のものを見抜くことができる。逆に、「素晴らしい」写真で園児に伝わらない場合は、想像図を描いた方がいい。(8) 園児の中に入ってもみちやにされながら話を聞くと、さまざまな質問をしてくれる。天文学者になるという者も、すでにいる。天文学会員は、この歳の時に天文の仕事をする決めていたであろうか。(9) 大阪市内の保育園にアンケートを取ったところ、七夕やお月見の時を中心に、星に関する活動がある園がある。その園では、保育者がプラネタリウムやキャンプでの星の観察などの経験をお持ちだった。